

断章 旭川のアイヌ語地名研究

70

高橋 基

これまで六回にわたり、ニッネカムイとサマイクルカムイの伝説の岩を中心に紹介してきた。今回からは、再び③の「鬼の足跡」から上流へ向かいアイヌ語地名を見ていきたい。

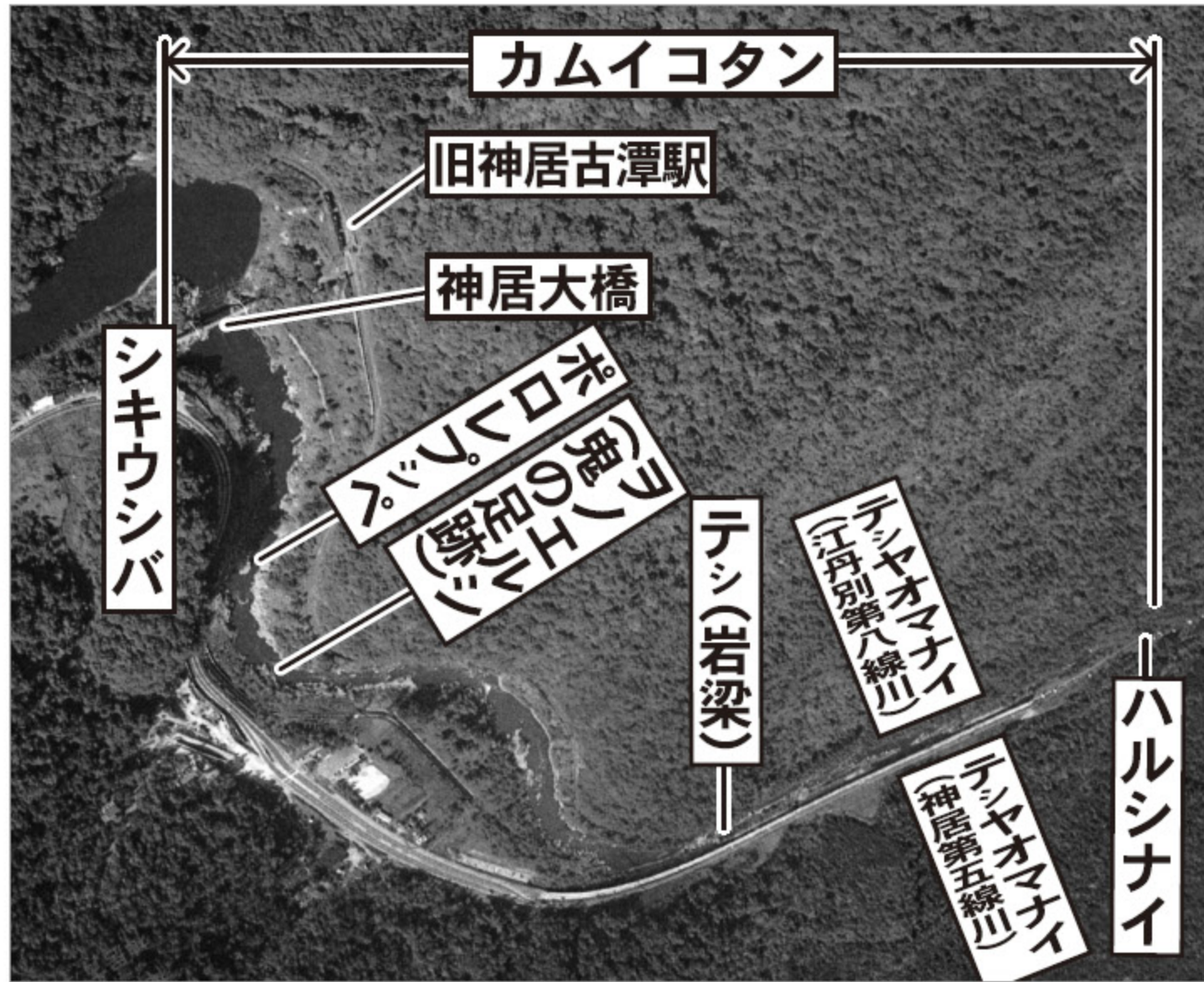
安政四年(一八五七年)に松浦武四郎は、神居大橋付近のシキウシバ(荷物背負場)から、ハルシナイまでの約三キロを、「カムイコタンと云、また、シユホロとも云。シユホロは両方峨々として、中を水の落る処と云事也。カモイコタンとは神が有る処と云事也。」と「再篙石狩日誌」に書いた。

今回は、掲載地図に加え、昭和五十五年撮影のシキウシバからハルシナイまでの航空写真を載せた(旭川開発建設部刊行)。約三キロのカムイコタンは、アイヌの人たちも、この区間だけは、丸木舟で航行できない、石狩川最大の難所であった。川幅が狭い上、兩岸は巨岩・奇岩の連続で、その間を

激流が流れている。こんな難所には、神様がいらっしゃるといっているので、カムイコタン(神の・居所)の尊称となった。別称がシユホロ=スポロ(sup-or 激流・の所)で、実際に歩いてみると、松浦武四郎が、「シユホロは両方峨々として、中を水の落る処と云事也。」と書いたのが実感できる。航空写真で、その狭隘な流路がお分かりいただけると思われる。

このカムイコタンの左岸のほぼ中間に、神居第六線川があり、アイヌ語名は、ポロオミントルナイである。航空写真でもわかるように、ここはカムイコタンの中で、唯一左岸の山際から

旭川のカムイコタン ②7



カムイコタン航空写真

石狩川までの間が広い場所である。この広い場所を松浦武四郎は「ミントル(mintar 庭)」と記述している。また、明治二十四年に永田方正は、「ミントル(mindaru 笹庭)」と書き、昭和三十五年に知里真志保は、「カムイミントル(kamuy-mintar 神々の遊び場)」と表記した。

さて、先に見た神居第六線川のアイヌ語名はポロオミントルナイで、その下流の対をなす小さな川が、ポントオミントルナイ(通称・砂金沢)である。明治時代の永田方正と、昭和時代の知里真志保の地名解をそれぞれ紹介する。



【明治の永田方正の地名解】

○「ポンノオミントルナイ(pon-no-o-mindaru-nai 小庭川)」「ポンノは小なり、「オ」は川尻なり、「ミントル」は庭なり、「ナイ」は川なり、此川尻の側に笹の平地あり故に名く。

○「ポロオミントルナイ(poro-o-mindaru-nai 大庭川)」「此川尻に広き笹庭あり、故に名く。此川に橋あり、第三十四号と記す。

【昭和の知里真志保の地名解】

○「ポン・オミントルナイ」。小オミントルナイ川の義。次項参照。

○「ポロ・オミントルナイ」。大オミントルナイ川の義。「オミントルナイ」(o-mintar-un-nay 川尻)・

神々の遊び場・ある・沢)。アイヌは大小二つの川が並んでいる時にそれを親子と考え、一方にポロ(poro 「親である」「大きい」)を、他方にポン(pon 「子である」「小さい」)を冠することがよくある。この場合も、「親である・オミントルナイ」「子である・オミントルナイ」が原義である。

安政時代の松浦武四郎は、神居第六線川の伝承ではなく、カムイコタン唯一の開けた場所として、ミントルオマイ(mintar-oma-i 庭・ある・所)と

伝承を記述したものと推量する。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します